

## 植物と歩く

練馬区立美術館(中村橋) 23.07.02~08.25



「植物と歩く」とは、一体どうゆうことだろうか？植物は一つの場所に留まっていながらも、根は地中に、茎や葉は地上に伸びて這い上がり、花を開かせてはしぼむ、その一生は動きに満ちている。

本展では、「植物と歩く」という言葉に、植物の営む時間と空間に感覚をひらき、ともに過ごすという意味を込めている。作家は、植物の営む時間と空間に感覚をひらき、ともに過ごすという意味を込めている。それは、植物を観察してその特徴をとらえようとするなかで、普段我々が気づかずに通り過ぎてしまうような意外な姿に迫り、自身の思いを重ねてイメージを作り上げるのかもしれない。

本展は、当館のコレクションを中心に展示し、植物がどのように作家を触発してきたかを探る企画で、日本画、洋画、版画、彫刻などの日本の近現代に作られた多様なジャンルの作品・資料「約80点」を展示している。

佐田勝 《野霧》(部分) 1970年代 油彩/キャンバス ポスター上下とも



牧野 富太郎 《ホテイラン》 1911年 紙に多色石版印刷 左

富太郎が名付けた香気ある紅紫の美花「ホテイイラン」は、本州中部の高山の森に生える大変美しい野生ランであるが、絶滅が危惧されている。

森 白甫 《夕紅》 1953年 紙本着色 右